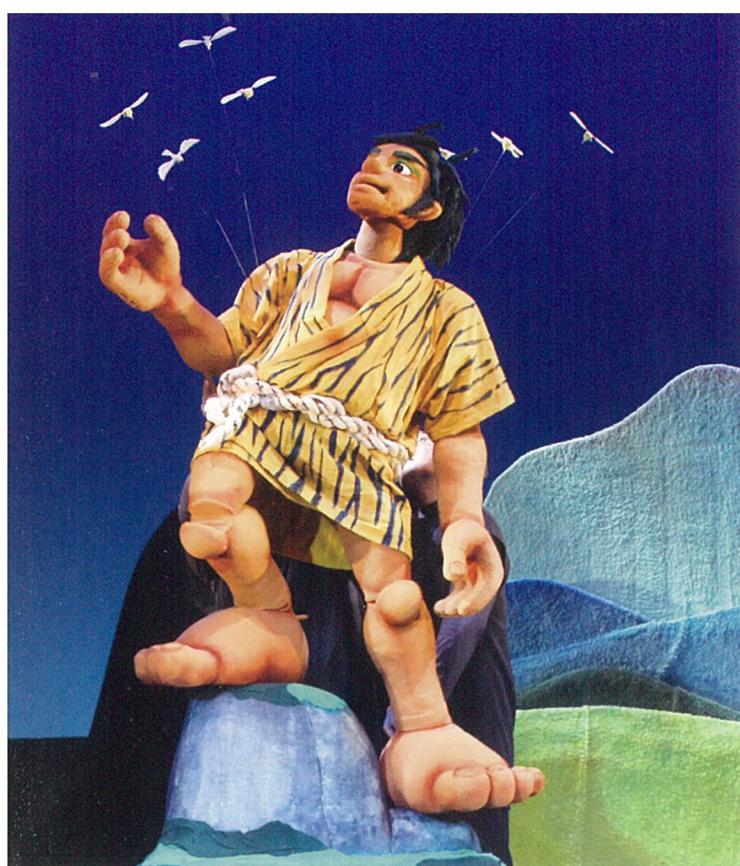


「おらあもつと大きくなりてえ」。強く願う八郎。海との戦いの末に、八郎が悟ったことは……。

八郎

原作／斎藤隆介・滝平二郎
(理論社刊愛蔵本「ペロ出しチョンマ」より)
脚色／川尻泰司 演出／岡本和彦
美術／坂上浩士 音楽／高橋久美子(日本音楽集団)
音響／吉川安志 照明／阿部千賀子

八郎はでっけでっけえ山男だ。八郎は毎日浜辺に出て、海に向かって「おらア大きくなりてえ、だれにもまけねえほど大きくなりてえだ」と叫ぶ。
ある年の秋海が荒れ、たわわに稲の実った田んぼに海が襲いかかろうとする。八郎は、荒れ狂う海からわらしこを、田んぼを救おうと押し寄せる波を押し返し、山をかついで海との戦いに挑む。そんな八郎になおも襲いかかる海、ついに八郎は……

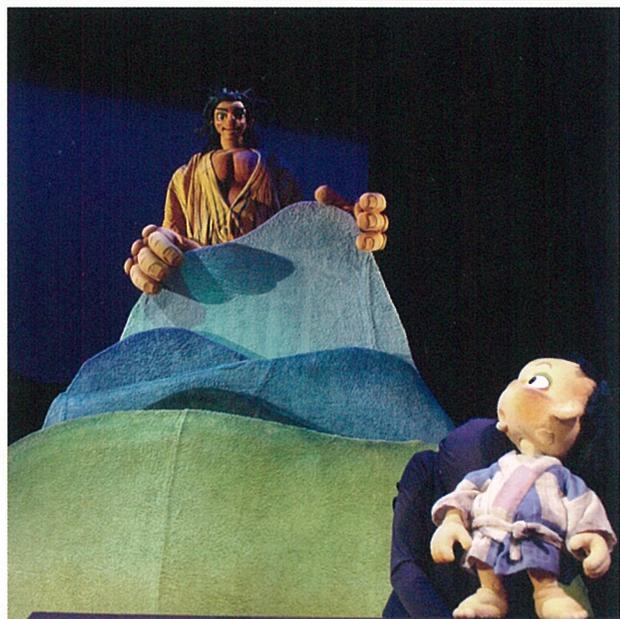


大きな優しさと勇氣 演出 岡本和彦

斎藤隆介・作、滝平二郎・画の絵本で知られる「八郎」は、東北地方に伝わる巨人伝説と秋田県、八郎潟の由来にまつわる話として描かれた創作民話です。

ブークでは1980年に川尻泰司・脚色、川尻原次・演出、1988年には川尻泰司・演出で上演されていますが、今回久しぶりに「ブー吉劇場」という移動公演で復活します。

大男の八郎がまだまだ大きくなりたいと思いつけるこのお話のなかで、八郎は自身でその訳を見出します。そこにある、大きな優



しさと勇氣は力強く、私たちの心を打ちます。「やさしい心は花を咲かせ、命をかけて人々を助ける人間は山をつくる」。私は演出にあたり、自分を大きくすることへの想いは、今の世の中の私たちの生き方や未来に関わる、とても大切なことに思えてなりません。それは、子どもの成長に置き換えた時に、「自分の力で自分を育てる」という大事な考え方につながり、さらには、その成長は「心の大きなおとな」を生み出すことに他ならないからです。私は、このお芝居を通して、私たちの未来が大きな優しさに包まれた社会であることを願ってやみません。

日本人の心の奥に染み入る祭囃子のリズムにのせてお贈りする、「ハレ」の舞台。

にんぎょう祭りばやし

構成・演出／岸本真理子 美術／佐久間弥生
音響／川名武 照明／阿部千賀子

私たち日本人の心に染み渡っている祭囃子。そのリズムと調べに子どももおとなも心は弾み「ハレ」の世界に誘(いざな)われる。軽快な祭りばやしに乗って獅子舞、猿まわし、龍の舞、南京玉すだれなどといった祭りの情景が人形達によって勇壮に、時にユーモラスに繰り広げられ、私たちの「祭り」への憧憬を満たしてくれます。

「にんぎょう祭りばやし」

演出 岸本真理子

私は子どもの頃から「お祭り女」と言われ、祭囃子が聞こえると心はウキウキ、身体は自然にリズムを刻みはじめるのです。けれど、祭囃子の音に心が踊る経験は、私に限らず多くの方がお持ちではないでしょうか。日本全国には数多くの祭りがあり、その「祭り」は豊かな自然風土の中で暮らす私たち日本人が、願いや祈り、そして感謝の気持ちを代々受け継いできたものです。

私は、そのような日本の大切な心の財産を、次世代に橋渡しができることを願って7年前に、人形と音楽によるファンタスティック・バラエティー「こどものための人形日本風土記」を創りましたが、今回はその第2弾として「祭りばやし」をコンセプトに構成いたしました。

「獅子舞・猿まわし・龍の舞・南京玉すだれ」など、人形たちが祭りばやしのリズムにのって披露する「日本のまつり」をお楽しみください。

